



Title	「から」と「ので」の構文的機能の相異について
Author(s)	重見, 一行
Citation	語文. 1996, 65, p. 25-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68888
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「から」と「ので」の構文的機能の相異について

重 見 一 行

一 「接続助詞」とは

現代語の「から」と「ので」は、普通共に接続助詞として議論されている。しかし、接続助詞とはどういうものか、また格助詞とどう異なるのかを、自分なりに確認しておかないと、この二つの語の本当の相異は見えてこない事になると思われる。そこで、まず接続助詞に対する筆者の従来の理解（重見 a 第二章第四節等）を示す事から論を始めようと思う。

山田孝雄氏は、接続助詞を「句と句とを結び合するもの」と言った⁽¹⁾（山田 404 p.）。山田氏の言う「句」とは、それが単独で実用されれば、「文」に相当するものである（今は述体句の場合のみを考える）。

しかし、このような山田氏の定義には多少補足すべき事がある（以下、所謂「順接」の場合のみを問題とする）。

本論として問題にすべき事の一つは、所謂仮定条件接続と確定条件接続の相異である。

山田氏は、これについて、接続助詞の資格の問題としては深く議論していない。しかし、「接続」の意義を考える点からは重要である。

筆者は、確定条件の場合こそ、真に「接続」の関係であり、この場合こそ、助詞は真の接続機能を發揮していると考ええる。と言うのは、この確定条件接続の場合の上接文言の述語こそ、真に「文」の述語に相当するものと考えられるからである。逆に言えば、仮定条件接続の述語は、真の述語とはいえない難いと思われるのである。それは、真の述語とはどういう事であろうか。

それには、まず述語の、文（句）にはたす役割の理解から述べなければならぬ。筆者の理解によれば、述語は文末にあって、その文全体の情報内容の、この世界での存在の時間的空間的あり方を限定するものである。かかる点はずでに幾度か論じて来た事であるが（重見 a 第一章第二節等）、一応要約しよう。

まず、情報の時間的空間的あり方を限定するとはどういう事かと言う、例えば、

(1) きれいな花が咲いた。

と言う時、これは「きれいな花」の「咲いた」というあり方での、この世界の存在を表現するものと考えられるが、このように、基本的に述語となる動詞（形容詞等に関する理解は重見 b 第二章参照）は、物事のこの世界での存在のあり方を表現している。その場合、「咲いた」と「散った」を比較してみると、「咲く」という時空の

占め方と、「散る」という時空の占め方は異なる。しかし、ある事物のこの世界での「時間的空間的存在を指定する」機能そのものは共通している。山田氏はこの点について、前者を各の述語の「属性」の相異と考え、後者を各の述語の「陳述」の共通として理解した（山田 678 p）。

およそ右のような理解において、筆者は、述語はある情報内容のこの世界での時空的定位を行うものだ、と言って来たのである。

次に、接続助詞の問題に直接する述語の問題を考えてみよう。例えば、

(2) a 昨日学校に行った。

b 昨日学校に行った気配はない。

右の二つの「行った」という表現を比較してみると、aは「昨日学校に行った」という情報が事実この世界に存在した、という事を表現していて、全体の情報内容の、この世界の現実の存在を確定しているのである。このような述語を持つ情報を筆者は「存在の情報」と名付けた。それに対して、bの「行った」は、この後に「気配はない」という叙述があるように、「事実」として行ったかどうか、つまり「昨日学校に行った」が存在の情報としては確定されていない表現だ、という事になる。換言すれば、この表現は、「昨日学校に行った」事自体は存在の情報であるともないとも言っているのではなく、発話中の一つの話柄として取り上げているにすぎない表現だ、という事になる。例えば、

(3) 昨日学校に行った事が判明した。

のような場合は、下に続く叙述によって、表現としてではなく、表現内容全体の中で結果として存在の情報であり得ているにすぎない

のである。このような、単に発話中の一つの成分情報でしかないようなものを筆者は「事柄の情報」と名付けた。

以上のように考えて、筆者は、真の述語とはその述語で括られた情報のまとまりが「存在の情報」である事を表現している場合だ、としたのである。

さて、このような述語に対する観点から、所謂接続助詞で結合された上下接文言の情報の性格を、確定条件と仮定条件において考えてみよう。

(4) a 昨日学校に行ったら彼に会えたらう。

b 昨日学校に行ったらので彼に会えたらう。

右のaの「行った」を考えてみると、これは「行ったとしたら」という仮定であるから、事実行っただけではない。つまり「存在の情報」ではない。この上接の情報は、いわば下接の情報が存在の情報であり得るための、前提条件の情報である。その意味では、表現の外形は述語をもった一つの独立した情報であるが、実質的には「事柄の情報」である。これに対して、bの「行った」という述語に括られた情報は、この世界の事実を述べたものとしての、「存在の情報」と言える。

以上のように考えると、山田氏の言う「句」が真に「文」の資格を有する場合は、その述語によって存在の情報を表現しているはずである。従って、真に「句と句とを結び合する」場合は、確定条件接続だと言えるのである。そしてこのような場合は、上下接情報を二つの別々の「文」として独立させて表現しても、実質的な表現意義にはば変りがないと言えるのである。次のように、

(4)' b 昨日学校に行った。彼に会えたらう。

このような確定条件接続による情報伝達の仕方は、まず一つの存在の情報を与え、次に時間をおいて別の存在の情報を送る、という表現の仕方であり、(上)↓(下)のように図示し得る表現関係と言えるのである。

これに対して仮定条件接続の場合を考えてみると、もし二つの文として独立させて表現するならば、先の(4)'と同じになって、元の仮定条件接続としての文意に反する事になる。この場合は、先述のように、実質的には上下接文言一体で、一つの存在の情報としての価値を生ずるものである。つまり(上)↓(下)のように図示出来るようなものである。

ただし、「仮定」と「確定」は上接情報の内容的相異であつて、接続助詞の基本的な「接続」意義そのものは変わらないと考えられる。

二 「修飾」と「接続」

さて、山田氏の定義で問題になる二つめは、古語の場合の、所謂狭義係助詞が接続助詞に下接したような場合である。

(5) なかなか思ひ出づるにつけてうたて侍ればこそ聞え出でね。

(岩波古典大系源氏五〇八p)

まず、このような係助詞の下接していない場合を考えてみよう。

(5)' なかなか思ひ出づるにつけてうたて侍れば聞え出でず。

これは「かえって思い出すにつけていやになりますので、過去を申しあげる事が出来ません」という意味になる。これは確定条件接続であるから、上下接文言を二つの別々の文として独立させて表現しても、基本的には意味が変わらないと考えられる。例えば、

(5)'' なかなか思ひ出づるにつけてうたて侍り。(されば)え聞え

出でず。

従つて、上下接文言の情報は共に存在の情報として、(上)↓(下)のような、時間的前後をもった別々の情報の伝達という表現となっていると考えられる。

これに対して(5)を考えてみると、この場合の上下接文言の情報内容の関係は、(5)'のように二文に分けて表現したのでは異なる事になるものである。何故ならこの場合、源氏物語中の浮舟の発言としては、次のような文脈上にあるからである。すなわち、ここは、身投げした浮舟が僧都に救われた後の、僧都の妹尼の質問に対する応答であり、尼が「さりともし思ひ出づる事は多からむを、尽きせず隔て給ふこそ心憂けれ」、つまり「色々思い出される事は多からうに、どこまでもお隠しになるのは残念です」と迫るに對してのものだからである。従つて、「ば」の下接文言「え聞え出でね」と言うのは、これから話す事を拒否しているのではない。拒否したのはすでに過去の事で、尼は、そのすでに確定した「拒否」の事実を詰問の根拠にしているのである。従つて、(5)の浮舟の応答も、その下接文言は旧情報で、独立した「文」としての発話意義を失っている事を承知で、上接文言にその旧情報の事実の「理由」を新情報として伝えるために、いわば上接文言の発話意義の「根拠」として付加したにすぎないものである。言い換えれば、(5)の上下接文言の関係は、下接文言の旧情報としての結果内容を、上接文言の理由提示の新情報内容で限定し補足する事によつて、「因果命題」という、全体としての一つの発話意義を生じている関係と言えるのである。

このような上下接文言の関係は、(5)におけるような、真の「接続」関係でないばかりでなく、先の仮定条件接続とも異なり、上下接文

言の關係は、上接文言が下接文言の内容を「限定・補足」するが故に、全体としての情報価値を生ずる事になる点で、例えば、

(6) ^a昨日学校に行った故に^b彼に会えた。

のaとbが「運用修飾」の關係と見られるように、(5)の上下接文言の關係も、「修飾」關係の一種と言えるのである。図示すれば、
(上) + (下) のような關係である。

それでは、(5)の場合の「ば」は(5)の場合の「は」とどのように異なる機能をはたしている事になるのであろうか。この点については、別に論じたように(重見c)、下接した「こそ」係助詞の、従来の理解で言えば、その上接文言「卓立」の機能によって、本来の「接続」機能としての「より前の情報→より後の情報」という表現機能を停止させられて、ただ「くだからくだ」と言った、上下接文言の「因果關係」という内容關係を指示するだけの、一種の格助詞、山田孝雄氏の言う(山田193p)「接続格」、いわば「原因理由格」的表示機能のみを發現する事になっている、と言えるのである。

以上のように見て来ると、外見の同様な「因果」的關係を表示する所謂確定条件接続の助詞も、実質的には、上下接文言が時間的順序の伝達として理解される事を否定する、同時一体的な一つの情報として理解されるべき、「修飾」的關係を發現している場合もある事に注意していただきたいのである。そして、このように見て来ると、所謂「接続助詞」と言われるものが、二種類の機能を有している事を知るのである(以下重見a第二章第四節参照)。

すなわち、一つは「因果關係表示」と言った、上下接文言の内容の關係を表示する機能であり、筆者はこれを「情報内容表示機能(論理的意味關係表示機能)」と名付けた。もう一方は、真の「接

続」機能としての、実質的に二つの別々の情報を時間的順序をもって伝達する事を表出する機能である。筆者はこれを「情報構造形成機能」と名付けた。(5)例のような場合は、「ば」が接続助詞として本来有している、「接続」という情報構造形成機能を、「こそ」係助詞の下接によって停止させられ(その方は「こそ」が担って「修飾」構造となり、「因果關係」という情報内容表示機能のみを實現しているのである。

三 「から」と「ので」

さて、いよいよ筆者の「から」と「ので」に対する理解を提供する事になるが、後でも述べるような、今日の言葉の性格の変化過程、多様な資料の洪水の中で、客觀的に十分な一般的論拠を提供する事は、相当困難なように思われる。この点で筆者は、すでに多くの先学によって言及され、ほぼ定説化している表現形態上の特性の一つを取り上げて、そこからの理解を述べる事にしたい。その点での諸賢の御批判は甘受せざるを得ないと思える。

その特性というのは、「のだ(のである)」文中では、「から」が用いられるのが普通であるという事実である。例えば、筆者の次のような調査でも明らかである。

次の1~4は各どちらの言い方が自然でしうか。

1 { a 彼が来たから出かけたんだ。
b 彼が来たので出かけたんだ。

2 { a 町はずれだからこんなに静かなんだ。
b 町はずれなのでこんなに静かなんだ。

3 a 苦しいからカバンをおろした。

b 苦しいのでカバンをおろした。

4 a 昨日は日曜だったからゆっくり休んだ。

b 昨日は日曜だったのでゆっくり休んだ。

計	高女大生	高知大生		
			a	1
45	28	17	b	2
12	7	5	a	
44	24	20	b	3
13	11	2	a	
18	9	9	b	4
39	26	13	a	
15	10	5	b	
42	25	17		

それでは、このような「のだ」文中での使用の自然と不自然とが、どのような「から」と「ので」の性格の相異を表明していると考えられるのであろうか。

この点を考えるにおいては、まず「のだ」文の性格を考えておく必要がある。この点についても、すでに先学の多くの論があり、筆者も論じて来た（重見 a 第一章第三節・c）。その間の見解のはば一致する所は、「のだ」文は、その上接叙述を「の」によってまとめ、一種の名詞句とし、それに「だ」が下接するという、一種の名詞述語文を形成するという点である。このように言われる「名詞句」を考えてみると、例えば、

(7) きのう学校に行ったんだ。

の波線部が名詞句と言われる（正確には「の」を含むと言うべきであるが）わけは、この場合の「行った」は(7)全体としての述語では

なく、波線部の叙述の形式的述語であり、全体で、一つの「事柄の情報」を表出しているからである。このような名詞句を一般的に考えてみると、これを構成する、「きのう」「学校に」「行った」という各成分は、それ等が統合して同時一体的に一つの事柄の情報を形成しているのであって、現実の発話における、まず「きのう」と発言し、次に「学校に」と発言する、言語における時間的線条性の制約にもかかわらず、これを理解するに当っては、同時一体的な「一つの情報」として受信する事を聞手に要求するものである。このような場合の各成分の関係は、先の真の「接続」関係の場合の、「より前の情報」より後の情報」という、時間的前後性の理解を聞手に要求する場合とは、基本的に構文意義を異にするものだ、と言わなければならない。このような名詞句内の成分関係は、従って「接続」の関係ではなく、例えば「きのう」が「学校に行った」の内容を限定補足する、所謂「修飾」の関係と理解しなければならないのである。

このように考えると、例えば、

(8) 風邪をひいたから学校を休んだんだ。

のように、「から」で結合された上下接文言が、「のだ」によって、全体としての一つの名詞句になっているという事は、「から」の上下接文言の関係は、全体としてまとまった、同時一体的情報として理解すべき「修飾」の関係だ、と考えられる事になるのである。つまり、この場合の上下接文言の関係は、上接文言の「因」の表現的内容が、下接文言の「果」の内容を補足限定、つまり「修飾」する事によって、全体としての「因果関係命題」において、同時一体的な情報意義を形成していると考えられるのである。従って、このような場合の「から」は、「接続」ではなく、「修飾」という情報構造

形成機能を発現している。という事になるのである。

以上のような「から」の性格の理論的帰結よりする時、逆に、「ので」が「のだ」文中に用いられにくい理由が推測されて来るわけである。つまり、「ので」は「修飾」関係を構成しにくいのである、基本的には「接続」関係に使用される、という事である。

改めて言えば、「から」も「ので」も、共に情報内容表示機能としては、「因果関係」を表示するものであるが、「から」の方は、先述の接続格・原因理由格と言うべき格助詞に近い性格を有するのであり、基本的には「修飾」という情報構造形成機能を発現するのである。これに対して「ので」は、基本的には接続助詞として、「接続」という情報構造形成機能を発現するのだ、と考えられるのである。端的に言えば、「から」はより格助詞的であり、「ので」はより接続助詞的だ、という事である。先の古語の(5)例で言えば、(5)の係助詞の下接したような構文を「から」が担当し、(5)の係助詞の下接しないような構文を「ので」が担当している、と考えられるのである。

このように考えると、下接文言が旧情報扱いで、上接文言の原因理由提示の部分が新情報の意義を有するような場合は「修飾」構造であり、その場合は「から」が用いられるという事になる。同時にこのような情報構造は「のだ」文として表現されるのが普通であるから、「から」が用いられながら「のだ」文でない場合は、落着かない表現になりやすい、という事になる。例えば尾方理恵氏が、

(9)昨日私は風邪だったから学校を休んだ。

という留学生の言い方は誤用と考え、

(9)昨日私は風邪だったから学校を休んだの(のだ)。

を正常な表現とし、その場合は「昨日欠席した事を相手が知っていて、『昨日来なかったね』と話しかけた状況が想定される」と言う(尾方38P)ごとくである。

また、このような「から」と「ので」の相異は、先学の指摘する次のような点でも確認出来るよう。

一つは、「からだ(からである)」という言い方は普通であるが、「のだだ」という言い方は普通ではない、と言われる点である。「ので」が「だ」に連結しにくい理由は他にも考えられるが、「からだ」表現、つまり原因理由部分のみを表現して、結果部分を省略する表現が多い事について、例えば永野賢氏は、「から」が「条件としての独立性が強い」(永野68P)と理解する。しかし筆者には、これは既述のように、「から」が「のだ」文中で「修飾」の関係を形成する故に、下接文言に旧情報を入れる事が出来るからであり、その場合は、下接文言は省略しても発話意義を失わないから(この「から」のように)、と思われるのである。発話意義のない情報は省略するのが、発話の経済と思われるのである。

また、「からこそ」という言い方はあるが、「のでこそ」という言い方はないという事が指摘されている。これも、「こそ」が今日「とりたて詞」と言われるように、多少にても古代の上接文言「卓立」の係助詞性を残していると考えれば当然と思われる。何故なら、例(5)で論じたように、このような「こそ」は強制的に「修飾」関係を創出するのであり、今日、接続的因果表現の「ので」に対して、修飾的因果表現を分担する事になった「から」の方と併用される事になったのは自然と思われるからである。

このような「から」と「ので」の相異を、更に尾方氏の論の問題

点を指摘する形で明らかにしてみよう。

尾方氏は、「から」が用いられるのは「のだ」文だけではないとして、「のだ」文でない場合は、「のだ」文中と逆に、下接文言の方が全文中の焦点情報となるという。そして、この点もふまえると、結局「から」の「のだ」と異なる点は、上下接文言いずれに焦点があるとしても、そこに、そのような情報価値の「落差」のある事を明示する機能を有する点だ、と言うのである。しかし、この点には疑問が生ずる。尾方氏の例文（尾方851P）について考えてみよう。氏は「鯨は魚か」という問に対して、

(10) a 鯨はひれを持つから魚である。

b 鯨は胎生だから魚ではない。

のような答え方があり得るとして、その場合は、「から」の上は「根拠」で、下が「主張」になるから、下接文言が焦点になる、と言うのである（尾方851P）。しかし、少しく考えてみると、「鯨は魚か」という問に対する右のような答え方は、普通ではない。筆者には、この問に対しては「鯨は魚である」とか「鯨は魚ではない」と答えるのが普通であろうと思われる。そして更に、「どうして魚なのか」とか「どうして魚ではないのか」と再度質問された時、(10)のような解答になるのが普通であろうと思われるのである。そして、その場合の(10)は、上接文言が焦点になっていると言わなければならないし、更にそのような場合は、尾方氏も言うように、「鯨はひれを持つから魚なんだ」のように、「のだ」文として表現されるのが普通と思われるのである。つまり、「鯨は魚か」という質問に対して、いきなり(10)のように答えるのは無理な解答の仕方であり、もし二種の質問に一度で答えた事になると言うのであれば、それは上下接文言が

共に焦点であると言わなければならないであろう。そして、上下接文言共に焦点に新情報であるような答え方をするのであれば、

(10) a' 鯨はひれを持つので魚である。

b' 鯨は胎生なので魚ではない。

のように、「のだ」で解答されるのが自然ではないかと思われるのである。このような表現であれば、上下接文言は「接続」関係として、「より前の情報→後の情報」より旧い情報より新しい情報」と聞手に理解される事になり、それを同時に聞手が理解するならば、「より価値のない情報+より価値のある情報」となり、比較的には、まさに尾方氏の言うように、下接文言の方が焦点情報と解される事になると思われるのである。

三 「修飾」関係としての「から」表現

これまで筆者は、「から」は修飾関係を形成する故に、普通には上接文言が焦点になる事を述べて来た。しかし、応答的な「のだ」文等でない、単独の「から」使用文には、尾方氏の言うように、下接文言が焦点らしく思われる場合もある。尾方氏の引用例（尾方850P）で考えてみよう。

(11) a ずっとマイペースでやってきましたからこれからも続けていくでしょう。

b かわいそうだから助けてあげるね。

これ等の表現が会話的であり、その場合、文章表現の場合より変化の先取りをしている可能性もある。また、このような場合、

(11) a' ずっと来ましたのでうでしよう。

b' かわいそうなので助けてあげるね。

のように、「ので」を使用するのが不自然なかどうか、という問題も残る。しかし、そのような問題を別にしても、述べて来たような筆者の理解で説明出来ないわけではない。

つまり、「から」が「原因理由格」と言った、より格助詞的な性格を有しているとするならば、それは既述のように、上接文言が下接文言を「修飾」する情報構造を形成するのが普通である。そしてその場合は、比較的には上接の修飾部分の方が発話意義の中心（焦点）になるのが普通である（重見 a 第一章第一節注 21、c 4 p 等参照）。しかし、(10)のような問に対する答としての発話の場合は、焦点性は明確に認定出来るが、独立的発話としての(11)のような場合は、必ずしも焦点を明確に判定し得ない事に注意すべきなのである。と言うのも、別稿で論じたように（重見 a 第一章第三節等）、一般に係助詞は情報構造形成機能を本務とするに対して、格助詞は情報内容表示機能が本務であって、「修飾」という情報構造形成機能は兼務であり、結果的な機能とも言えるものだからである。例えば「学校に行った」の場合は修飾関係を形成していると見られるが、「学校には行った」のような場合は、「は」係助詞の力によって、一種の接続関係になっている（所謂「題述」乃至「対比」の表現）のである（重見 a 第一章第三節）。従って、(10)のように、下接文言の末尾にモダリティ性の強い表現のある場合は、修飾関係らしい上接文言の焦点性は認定出来なくなるのである。このような格助詞の問題点を「が」について指摘しておこう。

久野暉氏は、「が」に「総記」と「中立叙述」の二つの意味機能を指摘した（久野 27 p）。

(12) 太郎が学生です。

のような「が」について久野氏は、「今話題になっている人物の中では、太郎だけが学生です」のような意味を表わしているとして、このような明確に上接文言が焦点と認められる場合を「総記」と名付けた。このような場合を考えてみると、「学生は誰ですか」「誰が学生ですか」という問が連想されるのであり、「のだ」文中の「から」表現の立場と同じだと言える。これに対して、

(13) オヤ、太郎が来ました。

のような場合を久野氏は、「観察出来る動作状態を表わす」として、何かの事物について、何かが叙述されるような場合の「が」を「中立叙述」と名付けた。つまり、このような場合の下接文言は、旧情報扱いではなく、ある動作や状態の叙述として、新情報的意義を有しているわけである。このような場合は、むしろ下接文言に情報の中心があるように理解されるのも、無理からぬ事と言える。しかし、それは、「が」に「総記」と「中立叙述」という二つの異なる意味機能が本来所有されているという事ではなく、既述のように、元来格助詞の「修飾」構造形成機能が、結果的なものであるが故に、文脈上色々に理解されるといふだけの事である。先の(11)の「から」における、「が」の(13)例に相当するような場合も、そのように理解する事が出来るものと思われるのである。

四 「接続」関係としての「ので」表現

尾方理恵氏は、「ので」を「のだ」と同じ出自と考え、「ので」が上接文言をまとめて、一旦「陳述」するような形態を有するが故に、上下接文言は「二つの事態を並列に、ゆるやかに因果関係をもつものとして語る」のであり、「因」と「果」との間にどちらかが主で

どちらが従という落差がつくことはない」と言う(尾方37p)。

確かに接続関係は、最初に述べたように、基本的には、別々の「文」に分離し得るような情報を、情報内容的関係をつけながら、時間の順序をもつて伝達してゆく表現であるから、右のように理解されるのも誤りではない。

しかし、先にも述べたように、「接続」の関係は、その上下接の表現関係において、「より前の情報→より後の情報」より古い情報→より新しい情報」という関係として、聞手の受信を要求するものである。従ってそれは、上下接文言を同時に理解しようとすれば、「より価値のない情報+より価値のある情報」という理解になり、比較的には下接文言の方が、より焦点の情報として解される事になるのである。普通接続助詞的なものによる上接文言を「従属」節と言うのは、そういう聞手の理解を代弁したものと考えられるのである。

勿論、このような情報の価値関係は、「接続」という情報伝達法が自然と感覚させる相対的なものであるから、文法的構造とは言えないとも言える。そこに尾方氏の先のような理解も生れて来るものと思われるのである。

五 南理論と三上理論の問題

以上のように、「から」がより格助詞的であり、「ので」がより接続助詞的である、という筆者の理解からすれば、南不二男氏の重層的構文論(南a)としての、「から」と「ので」の理解とは逆だ、と言う事になる。つまり、南氏の結論よりすれば、「ので」は判断段階に属する語であり、「から」はそれより外側の表出段階の成分だ

と言う事になる(南a 14p)。言い換えれば、「ので」がより格助詞的であり、「から」がより接続助詞的だ、と言う事になる。この根拠になったのは、氏の従属節成分の調査結果(南a)である。つまり、「から」節には④提示の「は」成分や、⑤「おそらく・たぶん」のような陳述副詞、⑥「う・よう・だろう」の意志や推量の助動詞が入り得るが、「のだ」節にはいずれも入り得ないという事である。

しかし、このような結論には少しく疑問が生ずる。まず④であるが、どのような「は」を「提示」とするかは軽々には言えないと思われる。例えば、

⑭ その象は鼻が長かったので土地の人は高い所の木の実を取らせた。

のような表現は、格別不自然とも思われないのである。また⑤について考えてみると、

⑮ ろくに栄養のあるものも食べなかったのでやせてしまった。
のような例を氏自身掲げるように、陳述副詞の種類によるのである。

「たぶん」のような場合でも、

⑯ たぶん彼も来るのでにぎやかになるよ。

のような場合は、格別不自然とは思われない。不自然と思われるのは、

⑰ たぶん彼も来るだろうので。

のように、所謂推量系の助動詞が対応した時である。従って、南説の根拠として有効なのは⑥の場合だけだ、と考えられるのである。

このような話手の「推量」や「意志」の表現は、モダリティ性の強い助動詞と考えられ、今日ほぼ文末にしか用いられないという点で、これを上接し得る「から」の方がより接続助詞的であると考え

る事は、これまでの筆者の接続助詞論に照しても肯定されなければならぬ点である。しかし、これには次の点を指摘しなければならぬ。すなわち、「ので」の「順接確定条件接続」という性格である。確かに「う・よう・だろう」も、本来の意味は上接助詞の「不確定性」乃至「蓋然性」を表現するものとして、一種の客体的意味を有するとした筆者の助動詞論（重見d等）よりすれば、いわば「（未然の）蓋然的情報」として、「存在的情報」であり、事実の情報表現であり得るわけであるから、筆者の「ので」理解で言えば、「ので」の上にこのような助動詞を含む述語が来る事は不都合ではないはず、と言う事になろう。しかし一方では、「不確定」とはやはり「確定」していないと言う事である。つまり、「ので」の上にこれ等の助動詞が来にくいのは、「ので」が接続助詞的でないからではなく、「順接確定条件」を提示する接続助詞性、言い換えればこの世界に「確定」した存在の情報を上接するが故と思われるのである。それは情報内容的に来にくいという事であって、文法的な事象ではない、と言うべき事のように思われる。この点は一方でまた「から」と「ので」の歴史的変容過程に照して理解しなければならぬ事でもあろうが、古代の順接確定条件の「ば」接続助詞と同じ事情としても解釈出来るのである。つまり、今日の「う・だろう」の祖語に相当する「む（らむ・けむ）」は、「行かむに」とか「行かむを」のように格助詞や、「行かめども」のように逆接確定条件の接続助詞には上接するが、「行かめば」のように、「ば」に上接する事はないのである。このように考えると、南氏の「から」と「ので」に関する帰納的結論は、必ずしも正当と言えないように思われるのである。

南氏の理解に似たものに、三上章氏の、「ので」は軟式、「から」は硬式という理解がある（三上187p以下）。つまり、先の筆者の論に合わせて言えば、三上氏の「軟式」とはより格助詞的と言う事であり、「硬式」とはより接続助詞的と言う事である。従って、三上氏の「から」と「ので」の理解も筆者とは逆という事になるわけである。氏が右のように考える論拠の一つは、「ので」の上接活用語が連体形であるに對し、「から」のそれは終止形だと言う事である。氏は、終止形に下接するものだけを真の接続助詞に認定すると言っている（三上188p）。しかし、このような上接語の活用形で接続助詞性を判断する事自体に筆者は疑問を有する。その一点は、「から」が終止形接続と断定出来るかどうか、という点である。例えば筆者の生育環境では、

(18) これは高価なからとても買えない。

のように、形容動詞の連体形接続は普通であったと思われるし、学生に尋ねた所でも、21人中5人が肯定した結果もある。元来格助詞から変容した事を考えると、予想し得る事である。逆に「ので」で「静かだので」と言う者のある事が報告されてもいる。更に、「ので」が連体形接続であるとしても、それによって單純に接続助詞的でないと考える事には賛成出来ない。例えば古代語で仮定条件接続の「とも」は終止形に下接するが、確定条件接続の「ども」は已然形に、また「ば」は未然形か已然形にしか下接しないのである。

三上氏の主張のもう一つの重要な根拠は、「から」には「行きますから」「学校ですから」のように、「です・ます」の丁寧のモダリティ表現に下接しやすい点のある事である（三上291p以下）。これは三尾砂氏の調査結果（三尾246p以下）をもとにしたものである。

しかし、これをもって接続助詞の硬軟を論ずる事にはやはり疑問が生ずる。つまり、多くの先学の指摘するように、「ので」は文章語に、「から」は口頭乃至会話語によく用いられるという点である。

この故に「から」が丁寧調と関係が深くなって来た点に配慮する必要があると思われるのである。しかも、三尾氏の戯曲という会話主体の統計でも、「ので」が丁寧調に下接する割合はそれほど少なくはないとも思われるのである。三尾氏の資料例と筆者の例を示そう。

(19) あのみ今書き物をして居りますので、くぎりがついたら、すぐににおめにかかりますさうで御座います。(久米正雄全集10巻283 p)

(20) これからはO医師と荒井君がお相手をさせていただきますので、そのおつもりでいらして下さい。(荒井良へ幼ない生命と健康) 32 p)

六 古代語と現代語の接続助詞の相異

筆者はこれまで、「から」と「ので」の比較において、「より格助詞的」「より接続助詞的」のように、「より」という相対的言い方をして来た。この点についての筆者の見解を最後に述べてみよう。

今、順接的接続語に限定してみると、中古以前の古語としては、ほぼ「は」が思い出されるのみである。勿論「に・を・で」等も思い出されようが、「は」との間には接続助詞らしさの段差があろう。そして、その「は」は接続助詞としての中心的意義において、「仮定・確定」という「接続」の程度の相異や、「修飾・接続」の情報構造の相異を、未然形接続と已然形接続、あるいはそのままの使用と係助詞の下接と言った、明確な形態性において表現し分けている。

このような古語の状況に照す時、現代の接続的語は相当曖昧と言わなければならない。

まず、接続的役割をする表現は多様にあるが、接続助詞らしい中心的な語を限定する事が出事ない。そればかりか、「接続助詞」としての品詞的独立性を認定しにくい。「なら」を接続助詞と見ない人も多いし、「たら」を接続助詞と認定する人はいないであろう(「ら」を独立させるのは論外として)。「ので」を「のだ」の連用形的に解する人も多い。この他「て・と・つつ」等格助詞との区別が明確でないものも多い。

また、当該の接続語の機能の別を、それ自身あるいは上接語の形態的別として認定しにくい。例えば、「仮定」と「確定」の別を文脈によって判断しなければならない語が多い。

(21) a よく見ればわかるよ。

b よく見れば五円玉だった。

(22) a よく見たら違いがわかるよ。

b よく見たら違いがわかった。

この他「て・と」等々である。更に同じ確定的因果関係表現でも、その「修飾」と「接続」の情報構造の区別を、形態的に表出し分ける方法が十分でない。本稿で問題とした「から」と「ので」の、(10)と(19)、(11)と(14)の関係のように、どちらでも表現意義が相異しないように思われる例も多い。

このような現代語の状況は、次のように解釈出来るのではないかと思われる。まず、接続的表現の多様化は、先述のように接続助詞自身の多様化ではない。それはむしろ接続助詞としての独立性の喪失である。その結果は、接続助詞がそれとして本来有すべき「接続」

山田孝雄〈日本文法学概論〉
その他多くの研究の恩恵を受けた。

—兵庫教育大学教授—

という情報構造形成機能の喪失である。それを補う方法は、上下接文言の意味関係、すなわち情報内容的関係によって、聞手に結果的に情報構造的判断をゆだねる事である。先の例のような仮定と確定の別のように。その点では、「たら」も「なら」も、あるいは「て」も「と」も助動詞（乃至指定制詞）や格助詞そのものであってよいのである。その接統的情報構造の意義は、上下接文言の情報内容の關係で結果的に聞手が判断してくれるのである。と言うより、情報内容的に上下接文言の情報関係が理解されれば、情報構造の意義は問題にならなくなったのが、今日の接統的表現感覚、理解感覚なのだ、と思われるのである。比喩的に言えば、古代の接統表現は立体的であったが、今日のそれは平面的だ、と言えるように思われるのである。

注

(1) 山口亮二氏の接統法研究も山田文法に立脚していると理解する。
(2) 引用文献は次のものである。

尾方理恵『「から」と『ので』の使い分け』〈国語研究〉（松村明先生喜寿記念論文集）

久野暉『日本文法研究』

重見一行 a 〈助詞の構文機能研究〉・ b 〈日本語の文法を考える〉

（一九九六年三月刊行予定）・ c 『連体なり』文と係結び文と『のだ』文 高知大学教育学部研究報告 49・ d 『助動詞の「意味」』富

山大学教育学部紀要 40

永野賢『再説『から』と『ので』とはどう違うか』日本語学 7 の 13

益岡隆志『条件表現と文の概念レベル』〈日本語の条件表現〉

三尾砂『話しことばの文法』

三上章『現代語法序説』

南不二男 a 『現代語の語法』〈国文法講座 6〉・ b 〈現代日本語の構

造〉